

赤れんが

鳥取県立中央病院 広報誌
特別号 平成28年4月1日発行

● 病院長就任挨拶 ● 新病院建設について

病院長就任挨拶 池口 正英



平成28年4月より、鳥取県立中央病院長に就任いたしました池口正英です。私は、平成27年9月まで鳥取大学医学部附属病院で勤務し、消化器外科の診療・教育・研究に携わってきました。鳥取県立中央病院で初期研修を終えた若い先生が消化器外科教室に入局し、山陰地方の消化器外科医療に尽力いただいています事、大変感謝しています。その後、昨年10月から半年間、日野先生（前院長）のもとで副院長をさせていただき、多くのことを学びました。正直、鳥取県東部の医療事情はなかなか大学病院に伝わりにくく、全国の多くの自治体病院がそうであるように、「鳥取県立中央病院も医業収益が赤字でも補助金により黒字転換され、経営が成り立っているだろう」と思い込んでいる大学職員が多かったと思います。鳥取県立中央病院が全国で90病院ある医療機関群Ⅱ群の病院で、トップ17にあげられ（平成27年度）、医業収益本体で黒字を計上している、活気のある中規模病院であることを、私自身こちらで初めて知った次第です。職員の日頃の努力が県民（鳥取県の医療関係者）に正確に理解されていないことは大変残念であり、正当に評価されるため本誌が一助となれば幸いです。

ここ2年から3年にかけて、鳥取県立中央病院を取り巻く医療環境は大きく変化すると思います。平成28年度には診療報酬改定があり、今後消費税も10%に上がる見込みです。医師の世界では新専門医制度が新しく施行されようとしています。また、平成30年には新病院が開院します。今後、いかに病院が生き残っていくか、試される時代になっていきます。私は、院長就任にあたり、以下の3点を病院運営の柱と位置づけたいと考えます。1) 県立病院としての使命を全うすること。2) 優秀な人材の確保と育成。3) 健全な病院経営です。

1) 県立病院としての使命を全うする
鳥取県東部の医療機能再編が進められている中で、鳥取県立中央病院の使命として、○1高度急性期医療に特化していくこと、○2周産期医療を充実継続していくこと、○3がん診療連携拠点病院としての機能を果たしていくこと、○4災害拠点病院（基幹災害医療センター）として県民の命を守ることがあげられます。三次救急を全うするためには、救急医療を担う人材の確保と育成が急務です。ベット・コントロールを適切に運用し、地域医療機関との連携を今以上に密接にしていかなければなりません。また、三次救急とERをどう棲み分けるか、議論し検討する必要があります。

1) 県立病院としての使命を全うする

2) 優秀な人材の確保と育成
病院全体としての医師数はまだ十分ではありません。鳥取大学との連携を深め、積極的に医師派遣を行っていただくように努力してまいります。ここ数年研修医のマッチング率が低下していることが気がかりです。初期臨床研修医に魅力ある研修プログラムを提示し、大学病

2) 優秀な人材の確保と育成

院や他病院とのたすき掛け研修医を増やすことが可能か検討したいと思っています。看護師の離職率を抑えることも必要です。ワークライフ・バランスを充実させ、看護師のキャリアアップ（認定看護師、専門看護師等）を積極的に支援します。また、薬剤師の数も不足しています。医療安全上も薬剤師の増員は最重要課題であります。努力した人、病院経営に貢献した人、専門資格等を獲得した人が正当に評価され、何らかのインセンティブが与えられるような仕組みを考えていくことが必要と考えます。

3) 健全な病院経営
しっかりした経営基盤なくしては人材の確保や十分な医療が行えません。施行した医療の正当な代価として診療報酬が存在し、加算が得られることが当たり前の医療であり、要件を満たした領域では的確な加算が申請できるように、システムで考えていく必要があります。新たな算定ルールの下での看護必要度を25%以上とし、病院全体として7:1を堅持せねばなりません。また、DPCⅡ群病院であり続けることも重要です。そのために、必要なベット・コントロールを行い、病床稼働率を95%近くまで引き上げる必要があります。理想とするのは、患者支援センターを通して患者情報を一元管理する方法です。患者支援センターの業務として、以下のことが考えられます。

3) 健全な病院経営

1. 入院が決定した患者さんへの支援の説明（受けることができる制度等）、病院の入院案内、患者さんの情報（かかりつけ医もしくは近隣の病院、服用薬、病歴、退院後の支援先情報）、手術説明及び地域連携パス説明を通して、患者さんに必要な栄養指導、リハビリ等を紹介できる。また、退院後の患者さんの自宅復帰に関してかかりつけ医や近隣の医院の紹介、回復期病院への転院に関しての情報提供が入院前に行えることで、患者さんの不安も軽減できるのではないのでしょうか。また、緊急で入院した患者さんに対しても情報収集を行うことができると考えます。
2. 適切なベット・コントロールを行うことで救急医療に対応できる。
3. 退院の支援を円滑にできる。MSWが介入して、かかりつけ医への逆紹介や近隣医師への紹介を医師に提言できる。

即ち、患者支援センターで患者情報を管理運営するためには、センター内に事務職、看護職、MSW、薬剤師の常駐が望ましいと考えます。

鳥取県立中央病院は、平成30年には新病院が完成し、病床数も518床に拡大されます。大規模病院となるため、今まで培ってきた中規模病院としての機能が損なわれるのではないかと危惧しています。多額の建設費用による負のスパイラルに陥らないよう、気を配っていく必要があります。

病院は新しくなりますが、大切なのはそこで働く人材です。多くの優秀な人材を得て、また、多くの優れた人材を育成して、質の高い安全・安心な医療を住民の皆様へ提供することが、鳥取県立中央病院に与えられた使命であると思います。

鳥取県立中央病院は、平成30年には新病院が完成し、病床数も518床に拡大されます。大規模病院となるため、今まで培ってきた中規模病院としての機能が損なわれるのではないかと危惧しています。多額の建設費用による負のスパイラルに陥らないよう、気を配っていく必要があります。

病院は新しくなりますが、大切なのはそこで働く人材です。多くの優秀な人材を得て、また、多くの優れた人材を育成して、質の高い安全・安心な医療を住民の皆様へ提供することが、鳥取県立中央病院に与えられた使命であると思います。



